

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02661

研究課題名(和文)「留学生10万人計画」はいかに経験されたか 元就学生・教職員のライフストーリー

研究課題名(英文) Experiences under the "100,000 International Students Plan": Life stories of former students and teachers

研究代表者

田中 里奈 (TANAKA, Rina)

フェリス女学院大学・文学部・准教授

研究者番号：40532031

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1983年に策定された、いわゆる「留学生10万人計画」にさまざまな立場で関わった人々(就学生や日本語教師など)に対してライフストーリー・インタビューを行い、彼らの経験を収集し、分析・考察を行った。関係者たちが当時の教育の経験をどのように意味づけ、彼らの人生に位置づけているのかを捉え直すことを通じて、「留学生10万人計画」の内実を多様な視点から描くことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

管見の限りでは先行研究のなかった「箱根会議」の意義が明らかとなり、また、当時の教育現場にかかわっていた教師たちや元就学生/留学生の経験や意味づけの一端を明らかにすることを通じて、量的達成に焦点があてられがちな「留学生10万人計画」をより立体的に描き出すことができた。調査の過程で得られた当事者の語りは実名での公開を承諾されているものもあり、証言資料という観点からも価値があると思われる。

研究成果の概要(英文)：For this study, life-story interviews were conducted with persons involved in various aspects of the so-called "100,000 International Students Plan", established in 1983, such as former students, Japanese language teachers, etc. Their experiences were collected, analyzed, and considered. The interviews provided us with a chance to recapture and reconsider the significance that their educational experiences under said Plan had in their lives. This enabled this study to depict, from a variety of viewpoints, the facts and atmosphere surrounding the "100,000 International Students Plan."

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語教育史 留学生10万人計画 ライフストーリー 日本語教師 就学生

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2008年、日本政府はグローバル戦略の一環として「留学生30万人計画」を策定し、2020年を目途に日本に受け入れる留学生数を30万人にまで引き上げることを目標として掲げた。その計画の実現に向けて各方面で様々な事業が推進され、本研究が開始された2014年時点で、留学生数は約17万人に達していた。しかし、制度的な面での様々な困難が指摘され(栗原2009)、計画達成に疑問も投げかけられていた。そこで、先行事例である「留学生10万人計画」はどのように達成されたものだったのか、その内実を明らかにする必要があると考えた。

「留学生10万人計画」は、1983年の「二十一世紀への留学生政策に関する提言」と、翌年の「二十一世紀への留学生政策の展開について」において、基本的な方向性と枠組みが形づくられた留学生受け入れ計画のことを指す。この計画が公示されたことを受け、日本国内では、その目標達成のために、国立大学の学部への留学生専門教育教官の配置や大学への日本語教員養成課程の設置、日本語教育能力検定試験の開始、日本語学校の増設など、さまざまな整備が行われ、2004年に留学生数は当初目標としていた10万人に達した。しかし、その過程で、悪質な営利目的の日本語学校や偽造ビザで入国する就学生も増加するようになり、それは社会問題ともなった。

上記の計画に関しては、これまで、1988年に起きた上海事件や国内の日本語学校乱立などの社会的な状況を新聞記事・国会会議録から詳細に描いた研究(山本2014)や、日本の入国管理政策の規制緩和や中国等の留学生送り出し国の経済発展による私費留学生急増が計画の量的達成を支えたことを指摘した研究(茂住2010)など、主に社会状況や政策的観点からの検証が行われてきた。しかしながら、急増した就学生(注1)/留学生たち、また、その対応に追われた教育機関の教職員たちが、「留学生10万人計画」が実施されていた時期に実際にどのような経験をし、それらを意味づけている/きたのかといった視点は十分には明らかにされてこなかった。質問紙調査などをもとにした研究は行われてきたが、当時の関係者たちによる個別の経験や意味世界が十分に捉えられてきたとは言い難く、とりわけ、就学生に関する調査は留学生に関する調査と比べると圧倒的に少ない状況であった。就学生へのインタビューを試みた浅野(1997)においても、就学生個々の経験や意味世界がストーリーとして丁寧に描き出されているとは言い難い。

この他、途中で留学生活からドロップアウトしてしまった、または、せざるを得なかった人々やビザが取得できず来日を断念せざるを得なかった人々などの「挫折」の経験には着目されてこなかった。以上のように、従来の研究には調査対象の範囲や規模、調査方法に限界があったと思われるため、同計画を多層的には捉えることはできていなかったといえる。

2. 研究の目的

上記のような研究背景、および、問題意識のもと、本研究では、「留学生10万人計画」が遂行されていた時期に来日した就学生/留学生や、教育機関・仲介機関の教職員などの多様な立場の人々の語りを収集・記録・分析し、「留学生10万人計画」がどのように経験されたのかを多層的に描き出すことを目指した。当時の関係者たちの経験を詳細に描写することを通じて、量的達成に焦点があてられてきた計画の内実を当事者の視点から明らかにし、質的達成が果たしていかなるものであったかを読み解くこととした。また、こうした研究プロセスを経ることで、今後の留学生受け入れにおいて想定される課題を見出し、より充実した留学生受け入れや教育を実現していくための方策を議論・構想することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、理論的サンプリング法を用いて、「留学生10万人計画」にかかわった元就学生/留学生、日本語教師にライフストーリー・インタビュー調査を実施した。ライフストーリー法は、語り手の経験や主観的な意味世界を解釈する研究手法であり、研究蓄積が少なく、十分探究されていない社会的現実を照射するのに有効であるとされている(桜井2002)。個々の経験や意味づけから同計画の内実を明らかにしようとする本研究の目的や研究対象に適した手法であるため採用することとした。

(1)日本語教師へのライフストーリー・インタビュー調査

1980年代に日本語学校に勤務していた日本語教師11名、および、日本語教育振興協会の関係者1名に対して、研究分担者(佐藤、三代)が共同で2015年から2019年にかけて、各1~2回、1~5時間程度のライフストーリー・インタビュー調査を実施した。調査の初期の段階で、1997年10月に日本語教育振興協会によって開催された第1回日本語教育セミナー(通称「箱根会議」)が日本語学校にとって重要な意味をもち、大きなターニングポイントとなっていることが明らかとなったため、「箱根会議」に出席した教師たちを対象者に絞り、「箱根会議」や上海事件などの歴史的な出来事、日本語学校での教育をどのように意味づけているのかを中心にライフストーリーの聞き取りを行った。

(2)元就学生 / 留学生へのライフストーリー・インタビュー調査

1980年から2000年代初めまでに来日した元就学生 / 留学生 11名に対して、研究代表者(田中)と研究分担者(佐藤、山本)が、2015年から2019年にかけてインタビュー調査を実施した。聞き取りの内容は、主に、来日理由や経緯、当時の留学生活や日本語の授業、彼らの留学生活に対する意味づけ、留学終了後の日本での生活、日本での定住を選択した理由などであった。なお、研究開始当初は、多くの就学生 / 留学生を送り出していた中国などにおいても調査を実施し、留学後に帰国した人や留学を中断・断念した人などにもインタビュー調査を実施する予定であったが、田中と山本が、産前産後、および、育児休業を取得したことにより実施が困難となり、日本国内での調査のみに変更した。また、日本国内でのインタビュー調査でも、新型コロナウイルス感染症の影響により、中止となったものがある。

(1)、(2)いずれも、事前に研究の趣旨が書かれた「調査協力依頼書」を調査協力者に送付し、当日はそれをもとに研究内容に関して再度説明を行ってから調査を行った。調査協力者の承諾を得て、音声は録音し、フィールドノートもつけた。また、個人情報の取り扱いに関する規約である「研究倫理に関する誓約書」も交わした。インタビュー調査終了後は、音声データをもとにトランスクリプトを作成し、必要に応じて、沈黙やその長さ、抑揚なども書き加え、分析データとした。それら分析データを丹念に読み込み、それぞれの考察を行った。原稿執筆後には、語りの解釈の妥当性や歴史的背景などを各調査協力者に確認してもらった。

4. 研究成果

(1)日本語教師のライフストーリー研究

「留学生 10万人計画」実施時期に開催された「箱根会議」は、管見の限りでは研究として取り上げられてきたことはなかったが、日本語学校の歴史において大きな転換点であったことが明らかとなった。「箱根会議」を契機に、日本語教育振興協会と日本語学校との間の「管理する側 管理される側」という関係性に変化が起こり、それまで管理される側であった日本語学校は主体的に自らを定位し、国際交流の最前線を担う教育機関としての社会的アイデンティティを構築すべく歩みを進めるようになったのである(業績欄・論文1)。

就労目的の就学生を大量に受け入れる営利目的の日本語学校が急増するなど社会問題化された1980年代後半に、日本語学校でのキャリアをスタートさせた2名のライフストーリーより、教師たちが「日本語教師は職業として確立していない」という言説にいかにか抗い、日本語学校の教師として経験を重ねていったのかを明らかにした(業績欄・論文2)。

(2)元就学生 / 留学生のライフストーリー研究

ライフストーリー・インタビュー調査の協力者となった11名の語りからは、日本・日本語への興味や就労目的とも異なる就学 / 留学への意味づけも見られた。当時の出身国の社会的な状況や家族のなかでの立ち位置などにも後押しされる形で来日が選択されたり、その後の日本への居住が決定されたりしていた。現在、いくつかの軸を立てながら研究成果をまとめている段階にあるため詳細な記述は今後となるが、就学または留学という形で来日し、既に20~30年近く日本で居住している彼らのライフストーリーからは、現在急増している留学生や在日外国人の受け入れやその支援などに関する示唆も得られた。

<引用文献>

浅野慎一(1997)『日本で学ぶアジア系外国人 - 研修生・留学生・就学生の生活と文化変容』大学教育出版。

栗原孝(2009)「日本社会のグローバル化と留学生政策：留学生 30万人計画の妥当性の検討」『東アジアにおけるグローバリゼーションと国際化教育』亜細亜大学アジア研究所アジア研究シリーズ No.68, pp.7-43.

桜井厚(2002)『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房。

茂住和世(2010)「「留学生 30万人計画」の実現可能性をめぐる一考察」『東京情報大学研究論集』13(2), pp.40-52.

山本冴里(2014)『戦後の国家と日本語教育』くろしお出版。

(注1)大学・短期大学以外の日本語学校や専修・各種学校などの教育機関で学ぶ外国人学生を慣例で「就学生」と呼んでおり、1990年の入管法改正により在留資格「就学」が創設されたことにより、正式な呼称として「就学生」が定着した。2010年の入管法改正で「就学」が「留学」に一本化されたことにより、現在は「就学生」という呼称は用いられていないが、本研究では便宜上、分けて使用した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三代純平・佐藤正則	4. 巻 17
2. 論文標題 日本語学校の社会的アイデンティティ構築の歩み「箱根会議」という経験をめぐるライフストーリー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化教育研究	6. 最初と最後の頁 169-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤正則・三代純平	4. 巻 4
2. 論文標題 「職業として確立していない」言説に抵抗する語りー1980年代後半にキャリアを始めた日本語学校教師のライフストーリーから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 語りの地平	6. 最初と最後の頁 48-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中里奈	4. 巻 1
2. 論文標題 神奈川県における外国人住民のライフストーリー研究（18）BPさんへのインタビュー記録	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神奈川県における外国人住民のライフストーリー研究論文集	6. 最初と最後の頁 137-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細川英雄	4. 巻 15
2. 論文標題 学習者主体からことばの市民へ ポリティクスとしての言語文化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語文化教育研究	6. 最初と最後の頁 58-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 細川英雄
2. 発表標題 教えられないことを教える：社会的行為主体としてのことばの活動
3. 学会等名 第23回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤正則・三代純平
2. 発表標題 留学生10万人計画時代における日本語教師のライフストーリー
3. 学会等名 言語文化教育研究学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三代純平、佐藤正則
2. 発表標題 『実践研究の手引き』編集の背景と日本語教育的意味 編著者らへのインタビュー調査から
3. 学会等名 日本語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤正則、三代純平
2. 発表標題 「箱根会議」の日本語教育的意味 当事者たちのライフストーリーから
3. 学会等名 言語文化教育研究学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 細川英雄
2. 発表標題 「行動中心」アプローチの意味するもの 活動型日本語教育との比較から
3. 学会等名 日本語教育学会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 冴里 (YAMAMOTO Saeri) (00634750)	山口大学・国際総合科学部・准教授 (15501)	
研究分担者	細川 英雄 (HOSOKAWA Hideo) (80103604)	早稲田大学・国際学術院(日本語教育研究科)・名誉教授 (32689)	
研究分担者	三代 純平 (MIYO Jumpei) (80449347)	武蔵野美術大学・造形学部・准教授 (32681)	
研究分担者	佐藤 正則 (SATO Masanori) (50647964)	山野美容芸術短期大学・その他の部局等・講師 (42694)	